

茨城大学教員免許状更新講習における 小学校外国語活動講座の実践報告¹⁾

猪井 新一*

(2011年9月15日受理)

A Report of In-Service Teacher Training on Elementary School Foreign Language Activities
in the Teaching Certificate Renewal Program at Ibaraki University

Shin'ichi INOI

キーワード: 小学校外国語活動、教員免許状更新講習、教員研修

本稿は、平成 21 年度～平成 23 年度茨城大学教員免許状更新講習で実施された小学校外国語活動に関する講座の概要を報告し、受講生のアンケート回答を分析することである。講座内容には外国語活動に関する講義、英語活動、日本語活動が含まれる。アンケート回答の分析によると、受講生の満足度の高いものは、主として、外国語活動に関する講義、コミュニケーション活動を伴ったりゲーム性のある英語活動であった。講座の中に、講義形式と演習形式の両方を取り入れたことは有効であった。母語への気づきを促すことをねらった日本語活動は、総じて、英語活動ほど高い評価を得られなかった。日本語活動は、受講生に無意識なルールを気づかせるような工夫や、英語や他の外国語と結びつけるような工夫が必要と思われる。

はじめに

茨城大学における教員免許状更新講習は、試行期間を経て、平成 21 年度より年 2 回（Ⅰ期・Ⅱ期）と本格的に実施され、平成 23 年度で 3 年目を迎える。小学校外国語活動に関する講座も、毎年Ⅰ期・Ⅱ期と開講されてきており、研修講座内容に関する受講生からの評価アンケートもかなり蓄積されてきた。本稿の目的は、平成 21 年度～平成 22 年度のⅠ期・Ⅱ期および平成 23 年度Ⅰ期、合計 5 回実施された小学校外国語活動講座の概要を報告し、受講生のアンケートへの回答を分析することである。分析結果は、今後の小学校外国語活動に関する教員研修に生かしてゆきたい。

教員免許状更新講習に小学校外国語活動に関する講座が開設された理由は、平成 23 年度から

*茨城大学教育学部

の小学校外国語活動の完全実施に対応しようとするものであった。平成 20 年 12 月に『小学校学習指導要領解説外国語編』の刊行により学習指導要領が改訂され、正式に小学校 5、6 年生に年間当たり 35 時間単位の外国語活動が新設された。新設の理由は、「総合的な学習の時間」を活用して国際理解教育の一環として外国語（英語）会話などに慣れ親しんできたが、各学校における取組に相当のばらつきがあり、教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続等の観点から国として各学校において共通に指導する内容を示すことが必要であるためであった（文部科学省, 2008, p.4）。本学における教員免許状更新講習において、この新設された外国語活動に対応する講座への受講生の要望が高いことが予想され、平成 21 年度と平成 22 年度は「小学校英語」と「小学校英語活動」という名称の異なる講座が 2 コマ開設された。講師として、茨城大学教育学部英語教室所属の筆者と齋藤英敏准教授が 2 講座とも TT (=Team teaching) の形式で担当することとなった。両名とも英語教育学を専門とし、本学では英語科教育法を担当している。TT を採用した理由は、講座開講当初の平成 21 年度は 2 人とも小学校外国語活動の研修講師は初めての経験であること、さらに英語活動の見本を示す際に TT の方が好都合であったためである。しかし、平成 23 年度からは当初 2 コマあった講座が「小学校英語」のみの 1 講座へ減少し、担当者も筆者のみとなっている。

小学校外国語活動講座概要

1. 受講生数及びシラバス

「小学校英語」と「小学校英語活動」はそれぞれ 3 時間講座であり、実施日と受講生数は表 1、表 2 の通りである。なお、「小学校英語活動」講座は平成 22 年度Ⅱ期および平成 23 年度Ⅰ期は開

表 1 「小学校英語」講座の実施日と受講生数

	実施日	受講生数	内 訳
平成 21 年度Ⅰ期	8 月 19 日	32	小学校 19
			中学校 10
			高校 3
Ⅱ期	12 月 25 日	9	小学校 3
			中学校 3
			高校 2
			その他 * 1
平成 22 年度Ⅰ期	8 月 23 日	20	小学校 15
			中学校 2
			高校 2
			その他 * 1
Ⅱ期	12 月 25 日	12	小学校 6
			中学校 4
			高校 2
平成 23 年度Ⅰ期	8 月 20 日	40	小学校 20
			中学校 10
			高校 9
			その他 * 1
合計		113	

* 「その他」には養護学校、塾などが分類されている。

表2「小学校英語活動」講座の実施日と受講生数

	実施日	受講生数	内訳
平成21年度Ⅰ期	8月20日	26	小学校 11
			中学校 12
			高校 1
			不明 2
Ⅱ期	12月26日	9	小学校 3
			中学校 3
			高校 2
			その他 1
平成22年度Ⅰ期	8月24日	15	小学校 5
			中学校 6
			高校 3
			不明 1
合計		50	

講されていない。表1、2に示されているように、2つの講座にこれまで延べ163名（113+50）の方が受講したことがわかる。さらに、小学校教員ばかりでなく、中学校教員、高校教員も受講しており、小学校外国語活動への関心は小学校教員のみに限定的には留まっているのではなく、その関心の高さがわかる。

「小学校英語」および「小学校英語活動」の講習内容・到達目標は表3、4の通りであり、受講生用に講習シラバスとして本学のWEB上に掲載された。表3、4は平成22年度分のものであるが、平成21年度および平成23年度の講習内容および到達目標とはほぼ同じである。「小学校英語」講座の講習内容は、表3の通り、前半は講義形式、後半は演習形式である。前半は小学校外国語活動の導入の経緯・目的等についてであり、後半は様々な外国語活動を実際に受講生に体験していただく内容である。一方、「小学校英語活動」講座の内容は、最初に15分程度の講義を入れ、その後は実際に外国語活動を体験していただくものであった。ただ、後半の部分に、グループに分かれて受講生自身が外国語活動の指導案を話し合っって作成し、10分程度の模擬授業をする機会を設けた（表4

表3「小学校英語」講座シラバス（平成22年度分）

講習内容	<ol style="list-style-type: none"> 1) 小学校外国語（英語）活動導入の経緯について説明します。 2) 外国語活動の目指すもの（新学習指導要領）について説明します。 3) 言語習得の観点から小学校英語活動を考えます。 4) アジア諸国の小学校英語教育の現状について説明します。 5) クラスルーム・イングリッシュを練習します。 6) 英語活動（チャンツ、ゲーム、コミュニケーション活動等）を実際に体験します。 7) 日本語を利用した活動を体験します。 8) 認定試験：上記1)から7)の内容を確認します。
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 小学校外国語活動導入の経緯、目的、諸課題等を理解します。 2) 実際に英語活動を体験することを通して、小学校外国語活動の意義を考え、現場で外国語活動に取り組もうとする意欲を培います。

表4 「小学校英語活動」講座シラバス (平成22年度分)

講習内容	1) 外国語活動の2面性(外国語習得と国際理解)について講義します。 2) 発音指導を体験します。 3) 歌・チャンツを体験します。 4) ゲームを体験します。 5) 「英語ノート」を活用した活動を体験します。 6) 日本語を利用した活動を体験します。 7) グループに分かれて、外国語(英語)活動案を作成し、実演します。 8) 認定試験:種々の言語活動を確認いたします。
到達目標	外国語指導の留意点に触れ、種々の外国語(英語)活動を実際に体験することにより、外国語活動に興味・関心が高まり、現場で外国語活動を実践してみようとする意欲を培います。

の7)を参照)。

2つの講座のそれぞれの終了時に、アンケートを実施し、講義や体験したいろいろな活動例を受講生に5段階で評価していただいた(5.とても役立つ 4.まあまあ役立つ 3.なんとも言えない 2.あまり役立たない 1.全く役立たない)。アンケート項目の最後に自由記述欄を設け、当該講座について思ったこと、感じたことなどを自由に記述していただいた。

2. 講座内容

以下に、「小学校英語」および「小学校英語活動」の2つの講座で実施した講義や活動例の概要を記述する。実施した講義内容や活動例は、前回の講習会で受講生から得られたアンケート結果に基づいて修正したり、新しいものを加えているために、年度によってその内容が多少異なる。本稿は、実施したすべての活動例を網羅的には取り上げてはいない。ここで記述するものは、小学校外国語活動に関する講義、6つの英語活動例、5つの日本語活動例である。講座の内容に日本語活動を取り入れた理由は、外国語活動は英語の学習だけをするのではなく、日本語も含めて広く言葉の学習をするという観点を含むということ(文部科学省, 2008, p. 7)を、明確にしたかった意図があった。

1) 「小学校外国語活動」の講義内容

外国語活動に関する講義は、表3の講習内容の1)~4)に相当する。小学校に外国語活動が導入された経緯やその目的、小学校英語教育に対する賛否両論、言語習得と小学校英語教育、アジア諸国の英語教育(特に韓国の小学校英語教育の現状と課題)、学級担任の役割等について、新学習指導要領にもふれながら講義をした。何よりも、小学校外国語活動の目的は英語のスピーキング・リスニングのスキルの養成が第一義ではなく、英語活動を通して人と言葉を用いて関わること、つまりコミュニケーションの楽しさや大切さを子供たちに体験させることがより重要であること(直山, 2008; 文部科学省, 2008)を、特に強調した。そして、そのような外国語活動の目的を達成するためには、ALTや地域のボランティアよりも、児童1人1人のことをよく理解している学級担任がより適任であり、学級担任が「英語を使おうとするモデル」(直山, 2008, p. 27)を児童に示すことの重要性を説いた。さらに、「他教科等の学習成果を、外国語

活動の中に適切に生かすために、相互の関連について検討し、指導計画に位置付けることが必要である」(文部科学省, 2008, p. 15)ためにも、全教科を担当する学級担任の方がよりふさわしいことも述べた。最後に、外国語活動の授業を実施したり参観したりする場合、そのような視点を持つことが極めて大切であるとも述べた。

2) キーボードタッチング²⁾

コンピュータのキーボードが描かれている用紙を配布し、児童はアルファベット、数字、句読点(コンマ、ピリオド、クエスチョンマーク)及びその他のキー (Shift キー、Tab キー等) が英語で言われるのを聞いて、キーボードを人差し指 1 本で指し示すという活動である。教師が英語を言う場合もあるし、CD 等の市販の英語の音声を使用する場合もある。実際に教師が児童相手にこの活動を実施する場合は、児童の実態に応じて、英語を言うスピードを変えることが必要である。この活動は英語を聞いて指を使って反応するものであり、英語を言う必要がないため負担感はさほど大きくはないと思われる。

3) 恐怖の 13

数字を使ったペア活動である。二人で互いに数字を 1 から順に英語で言い始め、13 を言った方が負けるというゲームである。一度に言えるのは、3 つまでの数字とする。この活動のねらいは、相手の言う英語をよく聞く必要があるということである。

4) 数字ピラミッド³⁾

図1のようなピラミッドのマスの中に、1 から 20 の数字から 15 個を選んで入れる。できるだけ多くのクラスメイトとじゃんけんをし、勝った方がピラミッドから好きな数字を選び、数字を英語で言ってマスに印をつける。負けた方も、その数字があればマスに印をつける。すべてのマスに印をつけたら終了とする。英語でのやり取りの例は次の通りである。

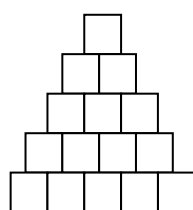


図1 数字ピラミッド

A: Hi!

B: Hi!

AB: Rock, scissors, paper. 1,2,3, shoot.

A(じゃんけんにしたった方とする): My number is ().

AB: (ともに、その数字に印をつける。) See you.

B: See you.

この活動のねらいは、上記のようなやり取りを通して、できるだけ多くの人と言葉を使ってコミュニケーションをするというものである。

5) 外来語や動物の名前の導入

絵カードを利用して、“What’s this?” の表現を用いながら外来語や動物の名前(banana, hamburger, tomato, strawberry, glove, guitar, milk, camera, hippo, ant, elephant 等) を導入する方法である。果物や動物等が描かれている絵を事前に別な紙等で隠しておき、徐々に提示する方法、

シルエットを提示する方法、裏返しにして素早く上下を一回転させる方法の3種類を提示した。このような提示方法のねらいは、絵カードに一体何が描かれているのだろうと児童に興味を抱かせ英語学習にワクワク感をもたせることである。

6) キーワード⁴⁾

ペア活動である。2人の机をくっつけ、その間に消しゴム等を置く。児童は教師が言う英語(数字、外来語、動物の名前等)を聞いて繰り返し、その後2回拍手をする。前もって決めておいたキーワードを聞いた時は、拍手をせず素早く消しゴムを取る。この活動のねらいは、教師の英語をよく聞くことである。

7) What am I?

まず、動物の名前(ant, bee, goldfish, hippo, dolphin, grasshopper, etc.)を「キーワード」等の活動を通して学習する。次に、色の名前、大きさ、長さの表現(yellow, green, black, gray, blue, white, big, small, long, short, tall, etc.)を学習する。そして、動詞(swim, fly, run, jump)を学習する。英語の表現として“Am I ~?” “Can I ~?”を導入する。

絵カードを1枚ずつ配布し、パートナーの背中にセロテープで張るように指示をする。この時点では、パートナーは自分が何の動物であるかは不明である。教室内を歩き回り、できるだけ多くの人と、そして、普段あまり話をしたことがない人と、以下のようなやり取りをするように指示をする。自分が何の動物であるかを分かったら、教師のところに来て“Am I an ant?”のように言って確認をする。できるだけ多くの人と話をすることがねらいであるため、1人の人に質問するのは1回と制限をする。

A: Hello. My name is ().

B: Hello. My name is (). Nice to meet you, ().

A: Nice to meet you, (). Am I black?

B: Yes / No / I don't know. (どれか1つの返答をする。)

A: Thank you.

B: Am I yellow?

A: Yes / No / I don't know. (どれか1つの返答をする。)

B: Thank you. See you.

A: See you.

上記のやり取りは自己紹介を兼ねてのやり取りであるが、すでによく知っているクラスメートの場合は、自己紹介の代わりにじゃんけんをし、勝った方が質問をするというようなやり方に変更もできる。また、児童の実態に応じて、使用する英語表現の難易度を調整する必要がある。この活動のねらいは、できるだけ多くの人と言葉を使ってコミュニケーションを図るというものである。

8) 「海」という漢字に、以下の1文字を加えて、海の生物を表わす漢字をつくる活動である⁵⁾。

月 老 苔 豹 豚 星 栗 象 狸 (例 海月) (くらげ)

(解答例)海老(えび) 海苔(のり) 海豹(あざらし) 海豚(イルカ) 海星(ひとで) 海栗(うに)
海象(せいうち) 海狸(ビーバー)

次に、これらの動物の絵が描かれている用紙を班ごとに配布し、教師が言う英語を聞いて(例えば、starfish)、漢字カードを動物の絵のところへ置いていく。この活動のねらいは、漢字はアルファベットとは異なり、意味を表すものであることを理解させ、母語への気づきを促すものである。

9) 日本語の複合語活動⁶⁾

以下の日本語の表現を組み合わせて、できるだけ多くの複合語をつくる班活動である。

放送 衛星 蜜 蜂 通学 学校 バス バナナ

複合語の例

放送学校 学校放送 衛星放送 放送衛星 蜜蜂 蜂蜜 通学バス バス通学

この活動のねらいは、日本語の複合語の全体の意味は2つめの単語の意味が決定するという複合語のルールを理解させ、母語への気づきを促すことである。

10) 日本語表現を長くする活動⁷⁾⁸⁾

例題にならって、単語を追加しながら、どれだけ長い表現を作ることができるかを指示をする。追加する単語は、前後あるいは途中で追加してよいとする。3~4人の班ごとに活動させる。

例 自動車→自動車工場→電気自動車工場→電気自動車工場見学→電気自動車工場見学プログラム

ム→電気自動車工場見学プログラム印刷→電気自動車工場見学プログラム印刷局

(下線部が追加された単語)

学校→

この活動のねらいは、単語を重ねると長い表現を作ることができることを通して、言葉(表現)の長さの無限性に気づかせることである。

11) 日本語の数の数え方⁹⁾

英語では、one, two, three, four, ... と数えて行くが、日本語では、「1本、2本、3本、4本」のように数える。日本語の数え方の読み方をどのように分類するかを班内で話し合う。ねらいは、母語への気づきを促すことである。

読み方の分類

1本 6本 8本 10本(「本」を「ぼん」と読む)

2本 4本 5本 7本 9本(「本」を「ほん」と読む)

3本(「本」を「ぼん」と読む)

解説¹⁰⁾

「いっぼん」のように「ぼん」と読む場合は、その前の読み方が促音であり、「っ」で表わされる。

「にほん」のように「ほん」と読む場合は、その前の読み方が [ni] のように直前が母音（この場合 [i]）となっている場合である。「ぼん」と読む場合は、その前の読み方が「ん」となっている場合である。4本はもともと「しほん」と読んでいたが、「し」は「死」を連想させるために、「よん」と読むようになったと言われる。

12) 創作漢字¹⁾

アルファベットと異なり、漢字は意味を表わすことに気づかせるために、新しく漢字を作ってみようという活動である。例えば、「苦豆」と書いて「コーヒー」と読ませるような活動である。

講座に対するアンケート結果及び考察

1. アンケート結果

表5は平成21年度～平成23年度において、講座の中で行われたいろいろな活動に対する受講生からの5段階によるアンケート評価の平均値である。平均値が5に近づけば近づくほど、受講生のその活動に対する評価、言い換えれば、満足度が高いということになる。

表5 講座内容の評価の平均値

	H21年度 I期	H21年度 II期	H22年度 I期	H22年度 II期	H23年度 I期
1)外国語活動講義	4.53	4.67	4.75	4.92	4.74
2)キーボード	4.44	4.78	4.55	4.33	4.50
3)恐怖の13	4.44	4.78	4.65	4.50	4.63
4)数字ピラミッド	4.56	4.78	4.75		
5)外来語・動物の名前 導入	4.69	4.89	4.60	4.58	4.75
6)キーワード*	4.50 / 4.58		4.65	4.58	4.65
7)What am I?***	4.81	5.00	4.67 / 4.67**	4.92	4.93
8)海の生物漢字			4.27		4.35
9)複合語作成	3.92				
10)長い表現作成			4.25		
11)数の数え方			4.60		
12)創作漢字				3.75	

*「キーワード」は、平成21年度I期は「小学校英語」と「小学校英語活動」の両方で実施され、「小学校英語」の平均値は4.50であり、「小学校英語活動」の平均値は4.58である。

**「What am I?」は、平成22年度I期は「小学校英語」と「小学校英語活動」の両方の講座で実施され、ともに平均値は4.67である。

表5の平均値が示す通り、年度あるいは時期によって受講生の講義や活動例に対する評価の平均値が異なるのがわかる。これは、毎年受講生が異なることや、同一名称の講義や活動であってもその内容が多少異なるためであると思われる。受講生の満足度が9割に達していることを示す値4.5(5点×0.9)を一つの基準値とすると、その基準値以上の平均値が得られたものは表5の網掛けの部分である。その中でも、常に平均値が4.5以上となっていたものは、「外国語活動講義」および「数字ピラミッド」、「外来語・動物の名前導入」、「キーワード」、「What am I?」の4つの英語活動である。日本語活動の「数の数え方」は一回だけ実施されたが、平均値が4.5を超えている。一方、この基準値を下回っていたのは、「海の生物漢字」、「複合語作成」、「長い表現作成」、「創作漢字」であり、いずれも日本語を利用した活動4例である。それ以外の活動(「キーボード」と「恐怖の13」)は平均値が4.5に達しない場合と、達した場合の両方があった。「キーボード」は5回実施したうち3回が、「恐怖の13」は5回のうち4回が、平均値が基準値4.5以上であった。

2. 考察

なぜ、表5のようなアンケート結果となったのかについて、受講生からのアンケートの自由記述への回答にも言及しながら考察を加えたい。

1) 外国語活動講義について

講義を通して、一体何のために小学校で外国語活動をするのかという目的を受講生が納得したことが高い平均値になっていると考えられる。受講生からは以下のような自由記述がアンケートにみられた。

- ・外国語活動の経緯・学級担任の役割がよく理解できました。(平成23年度I期受講生)
- ・小学校英語に求められているものがわかりました。(平成23年度I期受講生)
- ・外国語活動導入の経緯をしっかりと聞かせていただいたうえでの演習だったので、とても役立ちました。(平成23年度I期受講生)
- ・小学校での外国語活動について、今まであいまいな理解だったのが、少しははっきりできたことが、一番の収穫だった。(平成22年度II期受講生)

小学校の現場で、当然外国語活動の様々な教員研修がなされていると思われるが、いわゆる目的論についての研修があらためて必要であるように思われる。どうしても、一般的に外国語活動研修会というと、明日の授業ですぐに使える外国語活動の実践例やクラスルーム・イングリッシュの紹介が重宝されがちである。平成21年度、講習会事前に実施した小学校外国語活動に関するアンケート調査(猪井, 2009)によると、小学校教員が望む研修内容として、外国語活動の目的はさほど要望は高くはない。要望の高いものは、やはり英語の発音、クラスルーム・イングリッシュ、実践例等、すぐに教室で役立つものであった。教員研修に言及した泉(2007, p. 139)、川上(2008, p. 155)、高橋・青木(2006, p. 223)も、授業にすぐ役立つ指導方法を現職教員は研修内容として望んでいると、同様のことを述べている。しかし、上記の自由記述からわかるように外国語活動導入の目的や背景を理解した上で活動例を体験することが重要である。そうでないと、外国語活動が英語のリ

スニング・スピーキングのスキルの養成にすり替わってしまう場合がある。結果、ALT や英語を得意とする地域のボラティアに授業をお任せし、学級担任の授業への関わりが見えなくなってしまう恐れがある。そうならないためにも、外国語活動における学級担任の役割も含め、導入の目的を学習指導要領に沿って理解することは必須である。西崎（2009, p. 36）は、小学校における外国語活動導入により、児童英語や英会話を中心に進めてきた場合は、特に方針転換が必要であると述べており、外国語活動導入の目的をよく理解することの重要性を支持している。

2)英語活動について

評価の平均値がいずれも 4.5 以上であった「数字ピラミッド」、「外来語・動物の名前導入」、「キーワード」、「What am I?」はいずれも英語活動である。とりわけ、「What am I?」は、H22 年度 I 期を除くと、毎回の活動例の中で一番受講生の評価が高い活動である。この活動は、受講生が自分が何の動物であるかを当てるために、教室を歩き回り、多くの人とコミュニケーションを取る必然性のある活動である。類似の活動が「数字ピラミッド」である。どちらも、英語を使って多くの人と関わるという活動である。受講生はこのような活動を実際に体験することを通して、英語を使ってコミュニケーションをすることの楽しさを味わったため、満足度が高いと思われる。自由記述の中には以下のような感想があり、コミュニケーション活動を体験することの楽しさに言及している。

- ・実際にやってみることで、自分も楽しかったので、子供たちも楽しくできるだろうなと思えました。（平成 23 年度 I 期受講生）
- ・“What am I?”のゲームでは、私も楽しくクラスの他の方と英語でコミュニケーションする体験ができました。やはり体験することで初めて、“スキルの養成が目的ではない”と実感しました。（平成 23 年度 I 期受講生）

これらの受講生の自由記述は、講義の中で外国語活動導入の目的は人と言葉で関わること、つまりコミュニケーションの態度の育成であると言われたとしても、受講生が本当にそれを理解するには、実際に英語活動を通して、自らがそのことを体験して納得することが必要であることを示している。教員研修講座には、講義と演習（とりわけ英語コミュニケーション活動）の両方が必要である。高橋・青木（2006, p. 223）も、教員研修では、理論的枠組みについての講義および、受講生参加型のいわゆる体験型のワークショップの両方が必要であると述べている。その意味では、本学で実施してきた外国語活動に関する教員研修講座はその内容が妥当であると言える。

「外来語・動物の名前導入」は「What am I?」のような英語を使ってのコミュニケーション活動ではない。絵カードを提示しながら、それが何であるかを当てさせる活動である。最初は少ししか絵が見えないので何の絵であるかわからないから、もっと絵を見たいというような「わくわく感」があるために、受講生の満足度が高いと考えられる。さらに、そのような絵の提示の仕方は、小学校の学級担任にとって容易に実施可能と思われ、教室ですぐ使える教材提示方法であるとも考えられる。

「キーワード」は英語を用いたゲームである。この活動はペアで行うものであり、多くの人とは

関わることはないという点で、上記2つの活動「数字ピラミッド」「What am I?」とは性質が異なる。ただし、英語を使ったゲームということで、満足度が高いと考えられる。ペアで行う活動は他に「恐怖の13」がある。表5にある通り、平成21年度I期を除くと平均値が4.5以上であり、多くの人と関わらなくても、英語を用いてゲームをすることは楽しいと思われる。

「キーボード」は、前述した通り、英語聞いてそれを指で反応する活動である。他の人と関わる活動ではないために、さほど評価の平均値は高くなっていないと思われる。

3)日本語活動について

講座の内容に少なくとも1つの日本語活動を入れることで、外国語活動は英語だけを扱うのではないということを受講生に意識させようとした。表5にあるように、「数の数え方」活動は唯一日本語活動で平均値が4.5を超えた活動である。英語の場合と比較をしながら、日本語の数の数え方のルールを発見しながら、母語への気づきを促す活動である。この活動は、普段意識していない日本語の数え方について、そのルールをあれこれ話し合い意識化するという視点があったために、高い満足度になったのではないかと推察される。ただし、この活動は平成22年度I期にだけ実施をし、他の年度、時期には実施していないので、受講生の評価について断定的なことを述べることはできない。

それ以外の日本語活動「海の生物漢字」、「複合語作成」、「長い表現作成」、「創作漢字」はいずれも満足度の基準値4.5に達してはいない。あまり高くない平均値の理由がいくつか考えられる。まず、これらの活動は、そもそもそのねらいが母語へ気づきを促すことにあり、いずれも母語を利用してコミュニケーション活動やゲーム活動をするわけではない。この点が英語活動と大きく異なっている。

2つ目に、これらの日本語活動は当初母語への気づきを促すことをねらったものであるが、実際はそのねらいを達成するような活動ではなかった可能性がある。例えば、「海の生物漢字」の活動においては、「海」に1文字を追加して海の生き物を表わす表現を作成したのだが、これが果たして、漢字は意味を表わすという母語への気づきを促す活動であったかどうかは疑わしい。受講生にとって、漢字は意味を表わすというのは当然なことであり、あらためてこの活動を通してそのことに気づくまでもなかったと思われる。同様なことが「創作漢字」の活動に言える。さらに、「複合語作成」の活動は複合語のルールについて、そして「長い表現作成」の活動は母語を含めた言葉の無限性についての気づきを促すことをねらったのであるが、そのような母語への気づきをあらためてこのような日本語活動を通して体験する必要はなかったのではないかと推測される。日本語の「数の数え方」活動のように、普段あまり意識していない側面をより意識化するような視点（この場合、「本」の発音の仕方）があれば、母語への気づきを促すことになり、結果としてもう少し受講生からの反応が良かったのかもしれない。しかし、受講生からのアンケートの中には、日本語活動に関して以下のような肯定的な感想が見受けられた。

- ・日本語活動がとても新鮮に感じました。(平成23年度I期受講生)
- ・英語だけでなく、日本語活動も入っていたことが良かった。(平成22年度I期受講生)

外国語活動は、外国語を通して国語を含めて広く言葉への関心や興味を持たせることや国語教育に資することもその導入目的の一つであるから（文部科学省、2008, p.7）、今後とも教員研修会の中に、日本語と英語を関連付けながら、母語への気づきを促すような日本語活動を取り入れることは有意義と思われる。

まとめ

本稿は、平成 21 年度～平成 23 年度の茨城大学教員免許状更新講習において実施された小学校外国語活動講座に関する概要を報告し、受講生から得られたアンケートへの回答を分析した。延べ 163 名が当該講座を受講し、その中には小学校教員のみならず、中学校、高校の教員も数多くみられた。小学校外国語活動への関心の高さを示していると言えよう。講座の内容に関しては、受講生から総じて高い評価を得られた。とりわけ、外国語活動に関する講義、英語によるコミュニケーションを伴う活動、ゲーム性のある活動である。講義の中で外国語活動の目的や理論的背景にふれ、その後実際に英語活動を体験することで、受講生の外国語活動の理解が深まったと思われる。講義だけ、あるいは英語活動だけでは不十分であり、やはり講義と演習の両方を組み合わせることが教員研修では重要と思われる。

今後の課題としては、いかに日本語活動をより満足度の高いものにしていくかである。母語への気づきを促すためには、日本語活動はどうしても必要である。日本語活動は英語活動だけでは達成することができない部分を補う役割をもっている。日本語活動をより満足度の高いものにする方法として、カタカナ英語、和製英語、外来語等を通して、日本語と英語を結びつけることが考えられる。さらには、日本語の中でも、普段無意識となっている側面に焦点を当て、それを意識化するような活動である。その意味では、もっと国語教育と外国語活動の連携が必要と思われる。

注

- 1) 本研究は、平成 21～23 年度科学研究費補助金(基盤研究(c))課題番号[21530974]の研究成果の一部である。
- 2) 小川 (2007, pp. 40-41) から引用した活動例である。
- 3) 『英語ノート 1』、 p. 19 から引用した活動例である。
- 4) 『英語ノート 1 指導資料』、 p. 89 から引用した活動例である。
- 5) 『英語ノート 1』、 p. 46 でも扱っている活動であるが、講座で実施したものは「海」に追加する漢字を大幅に増加している。
- 6) 大津・窪菌 (2008, p. 92) も複合語の語順に言及している。
- 7) 猪井、他 (2011, p. 102) から引用した活動例である。
- 8) 文部科学省検定教科書『国語五 (下) 大地』(光村図書)、 pp. 28 - 29 においても日本語の複合語作成に言及している。
- 9) 大津・窪菌 (2008, pp. 150-151) から引用した活動例である。

- 10) 大津・窪菌 (2008, pp. 150 -151) から引用した解説例である。
11) 工藤 (2007, p. 14) からの引用した活動例である。

引用文献

- 泉 恵美子. 2007. 「小学校英語教育における担任の役割と指導者研修」『京都教育大学紀要』No. 110, pp. 131 - 147.
- 猪井 新一. 2009. 「英語活動に関する小学校教員の意識調査」『茨城大学教育実践研究』第 28 号, pp. 49 - 63.
- 猪井 新一・竝木 崇康・齋藤 英敏. 2011. 「日本語を活用した小学校外国語活動教員研修」『茨城大学教育学部紀要』(教育科学)60 号, pp. 97 -109.
- 大津 由紀雄・窪菌 晴夫. 2008. 『ことばの力を育む』. 慶應義塾大学出版会.
- 小川 隆夫. 2007. 『先生やろうよ! 2. 高学年のための小学校英語』. 松香フォニックス研究所.
- 川上 典子. 2008. 「小学校英語: これからの教員研修のあり方」『鹿児島純心女子大学国際人間学部紀要』第 14 号, pp. 145 - 159.
- 工藤 直子. 2007. 『ことばチャレンジ20』. 光村教育図書.
- 高橋 美由紀・青木 昭六. 2006. 「公立学校の英語活動における教員養成の実践的枠組みについて」『兵庫教育大学研究紀要』第 28 巻, pp. 215 - 225.
- 直山 木綿子. 2008. 『ゼロから創る小学校英語』. 文溪堂.
- 西崎 有多子. 2009. 「小学校外国語活動 (英語活動)のための教員研修—中央研修・中核教員研修・校内研修へ有効につなぐために」『東邦学誌』第 38 巻, 第 2 号, pp. 23 - 38.
- 宮地 裕、他. 2006. 『国語五 (下) 大地』. 光村図書出版.
- 文部科学省. 2008. 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』. 東洋館出版.
- 文部科学省. 2009. 『英語ノート1』. 教育出版.
- 文部科学省. 2009. 『英語ノート1指導資料』.